日本醫史學雜誌

第10巻　第1号

昭和37年5月20日発行

第63回日本医史学会総会講演要旨

特別講演

日本眼科史……中泉行正……(1)

会長講演

「蘭館日誌」の医史学的研究……大鳥蘭三郎……(11)

一般講演……(17)

雑報……(9)

昭和37年5月20日開催

会場　慶応大学医学部第2校舎講堂

国電・都電　信濃町　下車

会長　大鳥蘭三郎

通巻　第1355号

日本医史学会

振替口座　東京15250番

日本医史学会沿革

明治二五年（一八九二）富士川游氏らの発起により、先人の遺業を顕彰して医道の昂揚を図らんとする私立奨進医会を日本医史学会の前身とする。この年三月四日、杉田玄白らが小塚原観臓の記念日を卜し、東京根岸の古能波奈園において先哲追薦会を挙行し、爾後毎年これを挙行し総会を兼ねた。機関誌として「奨進医談」を刊行したが、のち内外の最新医学を紹介し併せて医道精神を昂揚するため、明治十三年（一八八〇）原田貞吉氏らが創刊せる「中外医事新報」を継承して機関誌となし、爾後、通巻一二八六号におよんだ。

大正四年（一九一五）一月、私立奨進医会を改組し、医史と道義に関する部門を分立して奨進医会と称し、他の事業部門を日本医師協会とし、「中外医事新報」を奨進医会機関誌として従前通りの編集方針を続行した。

昭和二年（一九二七）十一月十四日、奨進医会を日本医史学会と改称し、機関誌「中外医事新報」を第一一一七号（大正十五年十一月二十日）発行より、医史に関する専門誌として編集方針を変更。

昭和三年（一九二八）三月、会則その他を定め、初代理事長に呉秀三氏就任。

昭和七年（一九三二）三月、呉秀三氏の死去により入沢達吉氏理事長となる。

昭和九年（一九三四）四月、第九回日本医学会総会に際し、本会は第一分科会に加入し今日にいたる。

昭和十三年（一九三八）入沢達吉氏の死去により三代目理事長に富士川游氏就任。

昭和十六年（一九四一）一月、四代目理事長藤浪剛一氏就任。「中外医事新報」を第一二八七号以降「日本医史学雑誌」と改題す。

昭和十七年（一九四二）十二月、藤浪剛一氏の死去により五代目理事長に山崎佐氏就任。

昭和二十年（一九四五）一月、戦災により印刷所焼失のため、「日本医史学雑誌」発刊不能となり第一三三四号をもって休刊。

昭和二三年（一九四八）三月、戦後中絶せる恒例の医家先哲会を復興し、第五五回総会を挙行。

昭和二四年（一九四九）一月、中野操氏らの発起により昭和十三年に設立された杏林温故会を本会の支部組織とし、日本医史学会関西支部と称し、支部長に中野操氏就任。

昭和二七年（一九五二）十二月、関西支部機関誌「医譚」復刊（昭和十三年創刊より昭和十九年六月休刊まで十七号発刊）

昭和二八年（一九五三）七月、山崎佐氏理事長を辞し、六代目理事長に内山孝一氏就任。会則を改め、機関誌復刊を計画す。

昭和二九年（一九五四）三月、機関誌「日本医史学雑誌」復刊通巻制を廃し昭和十六年の改題時に溯り一年分を一巻とす。復刊第一号の通刊第一三三五号を第五巻第一号とす。同年三月二八日恒例の先哲医家追薦会を総会と改称し、第五六回総会を開き、毎年一回開催に定む。同年九月、第十四回国際医史学会議に始めて参加し、理事小川鼎三氏ローマ会議に本会代表として出席。

昭和三三年（一九五八）第六〇会総会開催に当り、記念事業として医学古典集を発刊。

昭和三五年（一九六〇）四月、内山孝一氏理事長を辞し、七代目理事長に小川鼎三氏就任。新たに総会会長を定む。

第六三回日本医史学会総会講演要旨

特別講演

日本眼科史

中泉行正

考古学や人類学の発達により有史以前に人類が地球上に住んでいた事が認められ、わが国でも新石器時代は勿論旧石器時代にも人類が生活を営んでいた事実が判明した。

人間が生活を営み、大自然との間に展開する自然への順応或は斗争のため、人間が住んでいる処には疾病もあり、又それを療する何らかの方法があつたものと思われる。それは単なる本能的行為と云つた類のもの（眼にごみが入ればそれを除去し、傷が出来ればその手当をする等）にせよ、そしてそれらは人間生活の発展に伴つて進歩もし改良もされたものと考えられる。

かようにわが国有史以前や有史以後の古代に於ける人類の間には少くともこの程度の医療はもつていたに違いない。しかしその医療が進歩、改良され、医療形態がやや判然となり、専門的或は職業的なものとして行われる様になつたのはもつともつと後世に入つて来てからの事である。

およそ一世紀頃には現在の中国、朝鮮等との交通が開け、四世紀半頃（三五〇）に大和朝廷の統一がほぼ完成し、中国、朝鮮との交通による文物の交流は所謂大陸文化の伝来を促し、易、暦等と共に医術が輸入された。更に六世紀の半（五五

二?）仏教の伝来を見て諸物の輸入と共に当時として相当に進歩した医療がわが国に入つて来たものらしい。

隋末から唐初頃、孫思邈によつて著わされたと云われる「千金方」の中には凡そ次の様なことが掲載されている。

目を極めて視ること。夜細かき書を読む事。久しく烟火におる事。抄写すること多年。博変すること休まず。日没後の読書。飲酒已まず。熱食麵食。彫鏤細かく作すこと。泣涙度を過す事。房室節なき事。夜遠く星火を視る事。しばしば日月輪に向いて看る事。月中の読書。目を極めて山川草木を瞻視する事。これ皆眼を損するの禁なり。

これら「千金方」眼科も相当進んだものである事がわかる。

その後、仏教の隆盛と共に渡来して来た人達の中には医師の徳来、僧医の鑑真と云う様な人があり、医療が僧職にある人達によつて行われる様になつて来た。七世紀の半（六五五）大化の改新が始まり、八世紀の初め（七〇一）の大宝元年に大宝令が発布され、その律令の医疾令の中には専門科として耳、目、口、歯科なる一分科が記載されるに及んだ。

系統医学として後世に伝えられるものに、ヨーロッパに於てヒポクラテス医学があり、又、アジアに於てもカラカ、ススルタ等の印度医学等があつて、これらの中には早くから緑内障や白内障についての論文やその治療法などが記されている。わが国の眼科は間接的ではあるが、これら印度眼科に関係があり、中国眼科を通じて種々輸入されているが、主に後世の明時代の眼科書によつて採入れられている。

斯くて既にわが国飛鳥時代以前に中国、印度及びギリシヤ等では眼科が相当に進んでいたものと思われる。

わが国に於ては古来の医方をもとに、平安時代に「大同類聚方」、「金蘭方」、「医心方」等が撰せられたが、その多くは隋、唐書を参考にして作られたもので、当時の医学としては相当に進歩していたものであつたと思われるが、それがどれだけ一般庶民の医療に消化吸収され、又実地に活用されていたかは疑問とする処で、例えば「医心方」の第五巻に白内障の治療についての記載があるが、これも隋の巣元方の著わした「病源候論」より引用したもので、白内障等に対する実際の手術は行われなかつたし、これだけの記載程度では実行出来なかつたと思われ、又その研究もより以上にはなされずに、

唯当時上流階級の一応の医学知識として留まつてしまつたものらしい。やはり実際に手術等が行われ始めたのは室町時代頃からであるらしい。

その後、鎌倉時代には宋の医学が輸入され、「頓医抄」、「万安方」等が撰せられたが、次第に解剖的知識が高まり、臓腑の位置等、身体の構造が略図乍ら挿入されて研究される様になつた。

わが国眼科の独立、即ち大宝令の医疾令中にある耳、目、口、歯科より別れて眼科独立呼称の一分科となつたのは、大体吉野朝から室町時代にかけての事と考えられ、この頃、支那に於ては元の世に当り医方に大方脈科他八科目を別けて、その中の一科に眼科が掲げられている。そしてわが国に於て眼科の専門医家が現われたのは、吉野時代中葉、南北朝前後の頃と考えられている。その初めは馬島蔵南坊中興の祖、清眼僧都と云うものにして夢の中に異人に遇つて奇方を伝えられたと云う事に淵源するのであるが、これがわが国眼科の鼻祖とも云われる所謂馬島流眼科を興した人である。又、眼科医師の始めについてはこれより先、鎌倉時代頃描かれたと云われる「病草子」（国宝指定）の中に、眼の少し見えない男と題して、眼の治療を行つている図が見られるが、この頃、眼病、その他の病気を療治していたものがあつたと考えられる。が、果してこれが医師、まして眼科専門医であつたかどうか容易に断定は出来ない。少くともこの頃、眼病を療治して廻る謂ば開業し乍ら巡廻診療的に個々の家々を廻つていた医家があつたのではないかと考えられる。

馬島流眼科は前にも述べた様に、平安時代初期、桓武天皇の延暦二十一年（八〇二）建立の尾張国医王山薬師寺を南北朝の中葉、正平十二年（一三五七）に清眼僧都と云う人が再建し、その初代となり、以後法燈を継ぐ者が眼療を兼ねる様になつた、と云う説による。馬島流眼科を創興して以後、その第十三世（円慶法印）の寛永年間、寺称を明眼院と改められたが、その継承者三十数世代にして今日に至つている。

この眼科は初め清眼僧都が夢中に異邦人に奇方を授かり、としているが、恐らくこれは明時代の眼科書を手に入れ、それに基いたものに考えられ、大体支那伝来の眼科を主軸とし、それに経験による創意工夫及び改良を加えて自己のものと

し、その眼療をわが国の人達に適する様に消化吸収実際化したものである。その後世今日に伝えられるものは諸々秘伝、秘書の類の域を出ず、口授、黙唱によつて人から人へ伝えられたものは確証出来ないが馬島流眼科の最も注目すべき眼療は針術であつて、中でもソコヒに対する妙術が他の流派に比べて上達していた模様である。そしてこれが実際化に努力したことは馬島流眼科のわが国眼科発展に連なる大きな功績とも云えよう。

わが国の中世から近世にかけては単に医道に限らず、文武何れの道に於ても自己の創意による改良、発見発明を得たものは直ちに学派、流儀、流派と云つたものを名乗る風習があつた。眼科馬島流以外にも何十派にも及ぶ眼科諸流派が興つた。今その名称だけを挙げて見ると

穂住(摂津)、南蛮(長崎?)、山口(不詳)、家里(伊賀?)、橘本(讃岐)、夢想(和泉)、佐々木(不詳)、酣韶(不詳)、青木(不詳)、須磨(不詳)、高田(筑前)、笠原(武蔵)、楠原(讃岐?)、田原(筑前)、馬渕(不詳)、井花(近江?)、竹内(諏訪眼科、信州)、根来(京都)、玉泉(不詳)、三井(大阪)、日下(不詳)、桑島(不詳)、三ヶ嶋(赤門眼科、武蔵)、服部(不詳)、中目(陸奥)、土生(安芸)、八幡(不詳)、東城(不詳)、児玉(不詳)、谷川(播磨)、紫雲(不詳)、江源(不詳)、実想院(不詳)、天悳(不詳)、白山院(薩摩?)、大竹(江州?)、甲斐(甲斐?)、東雲(不詳)、市畑(一畑薬師、島根)、白嗜国公禅(鳥取)、宮本(武蔵)、吉田(不詳)、柚木(京都)、九鬼殿(不詳)、西島(不詳)、八帰国蘇呂玉(不詳)、高山司慶(不詳)、蒸(不詳)、タンネル(不詳)、丹溪(不詳)、神教(不詳)、眼目入唐二国(不詳)、法相(不詳) 等々

戦国時代の頃より次第にポルトガルやスペイン人によるわが国との交易がキリスト教を媒体として盛んになり、戦国騒乱の世に当り、金瘡が大いに採入れられ、ここに当時の西洋人即ち南蛮人による南蛮流外科が入つて来た。その中に南蛮流眼科として一部にその存在を認められたが、大きな影響は及ぼさなかつた。唯、ここにそれは以後西洋医学輸入の萠芽となつた。

眼科諸流派が興り、その内容は大同小異であつたが、少しづつでもわが国眼科は歩一歩進歩して来た。しかし乍ら何と

云つてもその速度を遅らせていた最大原因の一つは、古来の風習とでも云える秘伝主義の陋習である。

かかる時期、元祿二年（一六八九）、「眼目明鑑」と云うわが国最初の眼科専門書の刊行を見て、わが国眼科を軌道に導く口火となつた。

その後、寛保二年（一七四二）、根来東叔は眼球内景図を掲げた「眼目曉解」なる書を著わして、謂わば眼球解剖の先駆をなした。この解剖的眼球の研究熱は宝暦四年（一七五四）、山脇東洋の解屍の実地により更に高まり、眼球の構造、機能、眼病の分類或は療法等眼科学の急速な進歩を見る事が出来た。例えば眼病分類等、これまでの一症一類的分類から症候の類似したものを以て一類とし、且つ解剖的観点を重視し、その機構上からも系統的に分類が行われる様になつた。

眼病分類の進歩に伴い、洋の東西を問わず、古くからあつたと思われるトラホームも眼瞼結膜病として寛政年代柚木太淳により類別される様になり、その治療も燈心草やカワハギの皮を乾燥したものを用いて摩擦療法が行われている。

次いで蘭学の輸入とその発達につれ、安永三年（一七七四）、杉田玄白等による蘭医書内景図譜（クルムス著、ターヘル・アナトミア）の翻訳が「解体新書」となつて刊行され、この中には眼球の解剖図等も掲げられていて、当時の人達はその精功さに驚嘆すると共に、西洋和蘭医学等に対する信頼を一層深め、それ以後恰も蘭書翻訳は最高潮に達した。眼科に関する翻訳書は、文化十二年（一九一五）、杉田立卿の「和蘭眼科新書」を初め、写本、刊本共非常に沢山行われた。今その書名又は表題のはつきりしたものの一部分を挙げて見る。

(1) 眼科解剖に関係あるもの

リシヤランド眼目解剖究理　　朋氏眼耳解剖書

マイフリール銀海燃犀録　　眼科解剖訳本

ブランカルト眼病篇

遠西医範眼目篇

(2) 眼科生理に関するもの

リシヤランド眼目究理篇

リシヤランド菲叔碌義新書

視学升堂

(3)

白内障手術に関係あるもの

越児物（エルウエ）眼科治論

ビスホロン治翳新法

ハン・オンセノールト白内翳方術論

(4)

眼科病理及治療に関係あるもの

リス眼目篇

ヘイステル眼目篇

ラシユウス眼目篇

業泄児瘍科大全眼目篇

モスト眼疾篇

モスト眼科発蘊

モスト黒障眼篇

外科必読

眼科新説

セリユース眼科書

セリユース灰翳説

ビユフネル眼科真筌

刺朱私瞳孔縮開論

般斯斯魯亜涅角膜曇暗班翳

試験治眼膏之説

視力乏弱病論

(5)

この他和蘭眼科をもとに訳述されたものに次の様なものがある。

ブルーメンバツハ眼目篇

ステヘンソン眼科書国訳未定稿

朋氏新精眼科全書

金篦一揆手術篇

眼科実地此事須知篇

朋氏眼科総論

朋氏眼科各論

朋氏光線窮理

朋氏眼科手術篇

抱桃英人身窮理眼篇

眼科治療書

抱度殷眼科書

耳眼詳説

チツトマン銀海秘録

西説眼科必読

眼科秘笈

炎施腰爾篤眼科書

眼科提要

しかし、この様な和蘭眼科学の輸入翻訳によるわが国眼科学の進歩はあつたのであるが、如何にもそれは文字を通して学び得た机上のものであつた。これが実際化に力となつた人が文政六年（一八二三）渡来したシーボルトである。彼はドイツに生れた人であるが日本研究のため、オランダ商館の医官としてわが国に渡来し、その活動は文化、科学百般にも及ぶ程で、就中、眼科に於ては多くの弟子を教導し、高良斉や土生玄碩等はその最も信頼を厚くもたれていた人達で、西洋眼科の実地を直接受けた最初でもある。又、葵絞服で有名な、シーボルト事件も、玄碩、父子の不屈の努力によりわが国眼科界に散瞳薬の活用を導入したものとして特筆しなければならない。

寛政六年（一七九四）プレンキの和蘭眼科書が輸入され、寛政四年（一七九七）柚木太淳の人眼の解剖、寛政十年（一七九八）英人、キール著の天文物理書（一七四一年刊）、を志筑忠雄が翻訳して「暦象新書」となし、その中に眼球の光通学を説く、文化七年（一八一〇）、眼証を論ずるに初めて眼球解剖図を載せ解剖的区分を採用した衣関順庵の著書眼目明弁が刊行される。文化十二年（一八一五）、杉田玄卿により、西洋眼科書反訳の第一書、「和蘭眼科新書」が刊行される（これはついで掲載図の一部を訂正し、「眼科新書」として刊行）、文化十四年（一八一七）、山田大円の「眼科提要」刊行、文政六年（一八二三）、シーボルトの渡来、同九年（一八二六）、樋口子星の「眼科撮要」刊行される。土生玄碩、玄昌父子、シーボルトより散瞳薬処方の教を受く、文政十一年（一八二八）、シーボルト事件、高良斉の「喝蘭銀海秘録」「西説眼科必読」等著わさる。上田公鼎の仮瞳孔術（虹彩切開術）の提唱、天保二年（一八三一）、本庄普一の漢蘭折衷眼科の提唱、「眼科錦嚢」の刊行、嘉永元年（一八四八）、鈴木通順の「揆翳針訣」刊行、同三年（一八五〇）、中目樗山の「目病真論」、「古今精撰眼科方筌」の刊行、安政四年（一八五七）、ポンペ長崎に渡来、文久二年（一八六二）、ボードイン渡来、長崎養生所は精得館と改称され、ボードインこれに着任する。文久三年（一八六三）、中川明甫編「眼科要略」

出る。

かように幕末頃の眼科関係の動きについて、その主なものを挙げても枚挙に遑なく、古く中国眼科を主軸として興つた馬島流眼科に於ても、その説及び療法に和蘭眼科の新風を採入れ、ここに、曾て黄金時代を鳴り轟かせた中国眼科も漸く衰退の道を辿るの止むなきに至り、わが国の医学は西洋医学の進出により、幕末に於ては漢方医学の殿堂たる江戸医学館と、西洋医学研究の同志集いの場とも云うべき西洋医学所とに袂を分つ事となつた。

破竹の勢で進出して来た西洋眼科学は幕府が文久元年（一八六一）、松本良順をして長崎に医学校『精得館』を建てしめてより、更に翌年ボードインを教師に迎えるに及んで、わが国眼科の学説、技術は一層の充実を見た。

その後一八六七年、徳川三百年の政運は果て、明治政府に代り、明治二年（一八六九）、西洋医学所は大学東校となり、眼科はミュルレル、エルメレンス、シュルツエ等外国教師に教導され、須田哲造、井上達也等はその初期の人達である。

明治六年（一八七三）六月、学術研究の成果を綴るわが国初の雑誌形態をもつ「文園雑誌」が田代基徳により、又同年十一月にはわが国初めての医学雑誌として「医事雑誌」が坪井信良によつて夫々創刊等あつたが、明治十五年五月（一八八二）、井上達也、須田哲造、安藤正胤、桐渕光斉、相良精一等は各自の実験研究の結論を講述し且つ眼科の新器を品評するの目的を以て、眼科専門第一会を開いている。この時の講述には須田哲造の内障翳手術、安藤正胤の結膜翼状贅片手術等の論文が掲載されている。（医事新聞、第五八号、明治十五年六月五日発行）これはわが国眼科専門部会の最初のものと思われる。明治十六年（一八八三）、梅錦之亟がドイツ留学より帰り、東京大学眼科主任に命ぜられ、わが国眼科初めての邦人教授に迎えられた。

その後、明治二十二年（一八八九）、井上達也により、「井上眼科研究会報告」が創刊され、同二十六年（一八九三）には、大西克知によつて「眼科雑誌」（日本眼科学会雑誌の前身）がわが国眼科専門雑誌として創刊された。

須田哲造、井上達也、梅錦之亟、甲野棐、河本重次郎、安藤正胤、桐渕光斉等わが国明治期眼科学の先駆者を迎えて、

その指導を独乙国眼科学に求め、日進月歩の発展を続け、明治二十九年（一八九六）、大西克知の首唱により、日本眼科学会が創立するの運びとなり、翌三十年（一八九七）二月二十七日、第一回日本眼科学会総会が日本橋、坂本小学校に於て開催され、その翌々月の四月、日本眼科学会雑誌が創刊された、今日、その創立以来六十六周年を数える事が出来た。

以上日本眼科の発達について略述した。

（研医会眼科図書館長）

雑　報

○蘭学事始記念会開催……昭和三十一年より行なつてきた蘭学事始記念会は、今年第七回目を迎え、日本医史学会主催で去る三月五日午後四時より新装の東大医学中央図書館会議室において開いた。緒方富雄理事の『蘭学事始の研究その後』と題する講演があり、別室で関係史料五十点の展観を十日まで行なつた。

○順天堂医大に医史学教室設置……本会理事長小川鼎三氏は本年三月、東京大学解剖学教授を定年退職されたが、改めて順天堂医大の医史学教授として就任された。わが国最初の医史学の専任教授であり、教室としての設置の初めである。とかく沈滞気味のわが国の医史学界にとつて近来のビツクニュースであり、最大の慶事であろう。

○内閣文庫国書目録完成……さきに漢籍目録を公刊して学界に多大の貢献をした内閣文庫では、その後鋭意国書目録の編集を進めてきたが、このほど上下二巻の国書目録が公刊になつた。医書は下巻に含まれているが、旧幕府の紅葉山文庫を継承しているのであらゆる点での利用価値を考えると、全巻を手許におくことが望ましいであろう。索引は別に今秋出版の予定。国書目録は上下とも各千円（送料別）頒布部数ごく少数につき希望者は皇居内大手一番、内閣文庫まで直接問合せの上所定の手続をへて購入されたい。

○山脇東洋二百年忌記念行事……今年はわが国実験医学の先駆者山脇東洋の死後二百年に当るので来る五月二十七日には関西支部で記念講演会を開催する。また宗田一理事の尽力で、吉富製薬バイエル薬品部の機関誌「今日の医学」付録として阿知波五郎理事

秘蔵の浅沼佐盈筆「蔵図」の原色版複製が頒布された。

○「**日本科学技術史**」**出版**……かねてから朝日新聞社において企画されていた本書は、このほど各分野の専門家三十六名の分担執筆により豪華な大冊となつて出版された。医史学関係では医学を石原・大鳥両理事が執筆、薬学を清水評議員が分担している。定価四五〇〇円A5判　朝日新聞社刊。

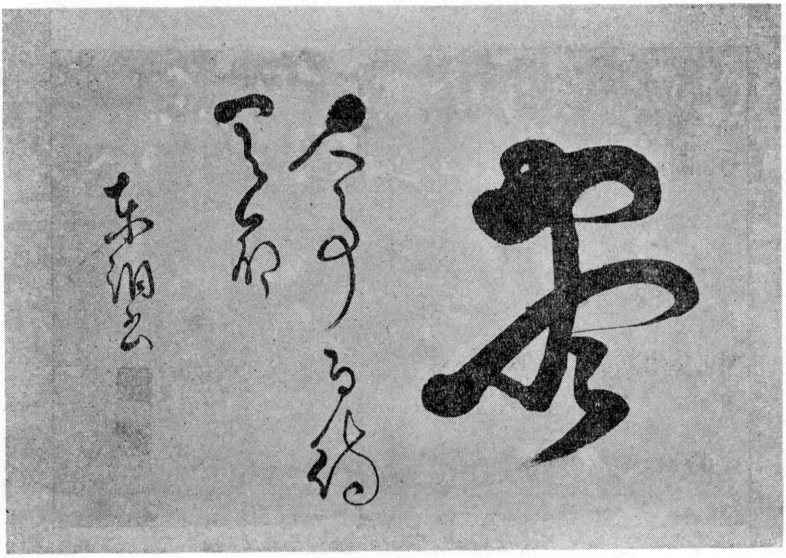
○**医史学雑誌発行について**……昨年度の総会の際しばらく休止していた本誌の発行につき運営委員会を設け、準備していたが、既刊の第九巻第二号以降の第三・四号はすでに印刷中であるが、総会講演要旨を先としたため、号数は本号を第十巻第一号とした。第九巻三・四号は後送するから御諒承を願いたい。

カット↓

吉益東洞筆蹟

盡人事而待天命

木村博昭氏旧蔵



会長講演

「蘭館日誌」の医史学的研究

大鳥蘭三郎

私は第六〇回日本医史学会総会で「日蘭医学交流史」と題する特別講演を行ない、十七世紀における日蘭医学の交渉について若干の考察を試みたが、それ等の考察は「蘭館日誌」を根本資料とした調査に基ずいたものであつた。二一九年の間続いたこの「日誌」を一応目を通し終つたいま、このものが医史学的にみてどんな価値を有しているか、その他の二、三の点について調べたところを申上げてみたい。

この二一九年間に渡日したオランダ商館の医長（「蘭館日誌」に opperchirurgijn または oppermeester と記されているもの。これまでは普通上外科と訳されていた。）の氏名は別表に記したとおりで、姓名が判明している者だけで六一人である。この数は予想された数よりもはるかに少ないが、これは前回にも記しておいた通り一人で数年間、中には十年間も引き続いてその職に就いていた人が多かつたためで、十八世紀に入つてからはその傾向が特に著るしくなつている。

「蘭館日誌」、オランダ商館についての説明はこの前に述べたところにゆずり、ここではすべて省略するが、オランダ商館が長崎出島にあつた間、すなわち一六四一年から一八六〇年の間の公式記録ともいえるいわゆる「蘭館日誌」の中の医学関係記事は凡そ次の七項目に分つことができる。

a、医学教授のこと。

b、病人診療のこと。

c、長崎郊外へ薬草採集のこと。

d、江戸で日本人医者と問答のこと。

e、薬品輸入のこと。

f、オランダ医学に特志を寄せる大名、奉行、その他の人々のこと。

g、スハムブルヘル、ライネ、ケンペル、ツンベルグ、シーボルト、モーニツケ等のこと。

これ等の項目についてそれぞれ数例の記載例を挙げて説明を試みることにする。

結論として次の諸点が指摘される。

この「蘭館日誌」は日蘭交渉を知る根本史料として極めて重要なものであるが、日蘭間の医学的交流を研究する上に好箇の史料となるものであることは疑うべくもない。ことに十七世紀におけるその蘭学関係記事は他によるべき史料に乏しいので特に貴重というべきである。

二百余年もの長い間続いた「蘭館日誌」は多くの歴代商館長の筆に成つたものであるだけにその記述は繁簡様々である。概して言えば十七世紀及び十八世紀前半のものは比較的詳しいがそれより後期のものは簡単である。従つて医学関係記事もそれに準じているということができるので、蘭学興隆期前後におけるその種の記事は予想外に簡略である。このことは私の期待に大いに反したところであるが、これを以て「蘭館日誌」の価値を云々することは妥当ではない。（慶応大学医学部医史学専任講師）

在任年度 西暦	在任年度 日本暦	氏名	在任年度 西暦	在任年度 日本暦	氏名
1641 — 42	寛永 18 — 19	Juriaen Henselingh	1666 — 67	寛文 6 — 7	Aernout Dirksen
42 — 43	寛永 19 — 20	Juriaen Henselingh	67 — 68	寛文 7 — 8	Aernout Dirksen
43 — 44	寛永 20—正保 1	Cornelis Stevenszoon	68 — 69	寛文 8 — 9	Aernout Dirksen
44 — 45	正保 1 — 2		69 — 70	寛文 9 — 10	Pieter van der Veste
45 — 46	正保 2 — 3	Mathijs Crousen	70 — 71	寛文 10 — 11	Monses Marcon
46 — 47	正保 3 — 4	Mathijs Crousen	71 — 72	寛文 11 — 12	Willem Hofman
47 — 48	正保 4—慶安 1		72 — 73	寛文 12—延宝 1	Willem Hofman
48 — 49	慶安 1 — 2		73 — 74	延宝 1 — 2	Willem Hofman
49 — 50	慶安 2 — 3	Casper Schaemburger	74 — 75	延宝 2 — 3	Willem Hofman
50 — 51	慶安 3 — 4		75 — 76	延宝 3 — 4	Willem ten Rhijne
51 — 52	慶安 4—承応 1		76 — 77	延宝 4 — 5	Reinier Weijn
52 — 53	承応 1 — 2		77 — 78	延宝 5 — 6	Reinier Weijn
53 — 54	承応 2 — 3	Jan Stipel	78 — 79	延宝 6 — 7	
54 — 55	承応 3—明暦 1	Johannes Wunsch	79 — 80	延宝 7 — 8	
55 — 56	明暦 1 — 2		80 — 81	延宝 8—天和 1	Jan Bartelsa Benedictus
56 — 57	明暦 2 — 3		81 — 82	天和 1 — 2	Jan Bartelsa Benedictus
57 — 58	明暦 3—万治 1		82 — 83	天和 2 — 3	Jan Bartelsa Benedictus
58 — 59	万治 1 — 2		83 — 84	天和 3—貞享 1	Hendrik Obé
59 — 60	万治 2 — 3		84 — 85	貞享 1 — 2	Hendrik Obé
60 — 61	万治 3—寛文 1	Willem Quarles	85 — 86	貞享 2 — 3	Hendrik Obè
61 — 62	寛文 1 — 2		86 — 87	貞享 3 — 4	Jan Bartelsa Benedictus
62 — 63	寛文 2 — 3	Daniel Busch	87 — 88	貞享 4—元禄 1	Jan Bartelsa Benedictus
63 — 64	寛文 3 — 4	Daniel Busch	88 — 89	元禄 1 — 2	Jan Bartelsa Benedictus
64 — 65	寛文 4 — 5	Daniel Busch	89 — 90	元禄 2 — 3	Jan Stockman
65 — 66	寛文 5 — 6	Johannes Wunsch	90 — 91	元禄 3 — 4	Engelbert Kaempfer

1691 — 92	元祿 4 — 5	Engelbert Kaempfer
92 — 93	元祿 5 — 6	Dirk Beekman
93 — 94	元祿 6 — 7	Dirk Beekman
94 — 95	元祿 7 — 8	Mathijs Raquet
95 — 96	元祿 8 — 9	Mathijs Raquet
96 — 97	元祿 9 — 10	Mathijs Raquet
97 — 98	元祿 10 — 11	Mathijs Raquet
98 — 99	元祿 11 — 12	Willem Wagemans
99 —1700	元祿 12 — 13	Jacobus Schoenmaker
1700 — 01	元祿 13 — 14	Willem Wagemans
01 — 02	元祿 14 — 15	Mathijs Raquet
02 — 03	元祿 15 — 16	
03 — 04	元祿 16—宝永 1	Pieter Kesteloot
04 — 05	宝永 1 — 2	Pieter Kesteloot
05 — 06	宝永 2 — 3	Hendrik van Genth
06 — 07	宝永 3 — 4	
07 — 08	宝永 4 — 5	Willem Wagemans
08 — 09	宝永 5 — 6	Willem Wagemans
09 — 10	宝永 6 — 7	Willem Wagemans
10 — 11	宝永 7—正德 1	Willem Wagemans
11 — 12	正德 1 — 2	Willem Wagemans
12 — 13	正德 2 — 3	Willem Wagemans
13 — 14	正德 3 — 4	Willem Wagemans
14 — 15	正德 4 — 5	Willem Wagemans
15 — 16	正德 5—享保 1	Willem Wagemans
16 — 17	享保 1 — 2	Willem Wagemans
17 — 18	享保 2 — 3	Barent Swart
18 — 19	享保 3 — 4	Barent Swart
1719 — 20	享保 4 — 5	Barent Swart
20 — 21	享保 5 — 6	Barent Swart
21 — 22	享保 6 — 7	Willem Ketelaar
22 — 23	享保 7 — 8	Willem Ketelaar
23 — 24	享保 8 — 9	Willem Ketelaar
24 — 25	享保 9 — 10	Willem Ketelaar
25 — 26	享保 10 — 11	David Drinkman
26 — 27	享保 11 — 12	David Drinkman
27 — 28	享保 12 — 13	David Drinkman
28 — 29	享保 13 — 14	David Drinkman
29 — 30	享保 14 — 15	Hervert Evertsz
30 — 31	享保 15 — 16	Hendrik Thompson
31 — 32	享保 16 — 17	Hendrik Thompson
32 — 33	享保 17 — 18	Hendrik Thompson
33 — 34	享保 18 — 19	Hendrik van den Haaster
34 — 35	享保 19 — 20	Hendrik van den Haaster
35 — 36	享保 20—元文 1	Nicolaas Wilmart
36 — 37	元文 1 — 2	Hendrik van den Haaster
37 — 38	元文 2 — 3	Hendrik van den Haaster
38 — 39	元文 3 — 4	Hendrik van den Haaster
39 — 40	元文 4 — 5	Philip Pieter Musculus
40 — 41	元文 5—寛保 1	Philip Pieter Musculus
41 — 42	寛保 1 — 2	Philip Pieter Musculus
42 — 43	寛保 2 — 3	Philip Pieter Musculus
43 — 44	寛保 3—延享 1	Philip Pieter Musculus
44 — 45	延享 1 — 2	Philip Pieter Musculus
45 — 46	延享 2 — 3	Peilip Pieter Musculus
46 — 47	延享 3 — 4	Peilip Pieter Musculus

1747 — 48	延享 4—寛延 1	Peilip Pieter Musculus
48 — 49	寛延 1 — 2	Doedo Evertsz
49 — 50	寛延 2 — 3	Andreas Koehler
50 — 51	寛延 3—宝暦 1	Doedo Evertsz
51 — 52	宝暦 1 — 2	Doedo Evertsz
52 — 53	宝暦 2 — 3	Doedo Evertsz
53 — 54	宝暦 3 — 4	Doedo Evertsz
54 — 55	宝暦 4 — 5	C. Gabriel Springer
55 — 56	宝暦 5 — 6	C. Gabriel Springer
56 — 57	宝暦 6 — 7	C. Gabriel Springer
57 — 58	宝暦 7 — 8	Cornelis Borstelman
58 — 59	宝暦 8 — 9	Cornelis Borstelman
59 — 60	宝暦 9 — 10	G. Rudolf Bauer
60 — 61	宝暦 10 — 11	G. Rudolf Bauer
61 — 62	宝暦 11 — 12	G. Rudolf Bauer
62 — 63	宝暦 12 — 13	Cornelis Borstelman
63 — 64	宝暦 13—明和 1	Cornelis Borstelman
64 — 65	明和 1 — 2	A. van Nieuwenhuijsen
65 — 66	明和 2 — 3	A. van Nieuwenhuijsen
66 — 67	明和 3 — 4	J. François de Hout
67 — 68	明和 4 — 5	J. François de Hout
68 — 69	明和 5 — 6	
69 — 70	明和 6 — 7	Jkarius Jacobus Kotwijk
70 — 71	明和 7 — 8	Jkarius Jacobus Kotwijk
71 — 72	明和 8—安永 1	Jkarius Jacobus Kotwijk
72 — 73	安永 1 — 2	Jkarius Jacobus Kotwijk
73 — 74	安永 2 — 3	Jkarius Jacobus Kotwijk
74 — 75	安永 3 — 4	Christ, Hendrik Terbitskij
1775 — 76	安永 4 — 5	Carel Pieter Thunberg
76 — 77	安永 5 — 6	Frederik Willem Hartman
77 — 78	安永 6 — 7	E. Lodewijk Pöhr
78 — 79	安永 7 — 8	E. R. Christiaanvan Beckstijn
79 — 80	安永 8 — 9	E. R. Christiaanvan Beckstijn
80 — 81	安永 9—天明 1	Ch. H. Gustaff Oberkampf
81 — 82	天明 1 — 2	Ch. H. Gustaff Oberkampf
82 — 83	天明 2 — 3	Ch. H. Gustaff Oberkampf
83 — 84	天明 3 — 4	Ch. H. Gustaff Oberkampf
84 — 85	天明 4 — 5	Johan George Falcke
85 — 86	天明 5 — 6	Johan George Falcke
86 — 87	天明 6 — 7	Johan August Loth
87 — 88	天明 7 — 8	J. A. Stutzer
88 — 89	天明 8—寛政 1	Johan August Loth
89 — 90	寛政 1 — 2	J. Adrianus Schell
90 — 91	寛政 2 — 3	L. A. Bernard Keller
91 — 92	寛政 3 — 4	L. A. Bernard Keller
92 — 93	寛政 4 — 5	L. A. Bernard Keller
93 — 94	寛政 5 — 6	L. A. Bernard Keller
94 — 95	寛政 6 — 7	L. A. Bernard Keller
95 — 96	寛政 7 — 8	
96 — 97	寛政 8 — 9	
97 — 98	寛政 9 — 10	
98 — 99	寛政 10 — 11	Hermanus Letzke
99 —1800	寛政 11 — 12	Hermanus Letzke
1800 — 01	寛政 12—享和 1	Hermanus Letzke
01 — 02	享和 1 — 2	Hermanus Letzke
02 — 03	享和 2 — 3	Hermanus Letzke

1803 — 04	享和 3—文化 1	
04 — 05	文化 1 — 2	Hermanus Letzke
05 — 06	文化 2 — 3	J. Frederik Feilke
06 — 07	文化 3 — 4	Jan Frederik Feilke
07 — 08	文化 4 — 5	Jan Frederik Feilke
08 — 09	文化 5 — 6	Jan Frederik Feilke
09 — 10	文化 6 — 7	Jan Frederik Feilke
10 — 11	文化 7 — 8	Jan Frederik Feilke
11 — 12	文化 8 — 9	
12 — 13	文化 9 — 10	
13 — 14	文化 10 — 11	Jan Frederik Feilke
14 — 15	文化 11 — 12	Jan Frederik Feilke
15 — 16	文化 12 — 13	
16 — 17	文化 13 — 14	
17 — 18	文化 14—文政 1	Gerhart Leendert Hagen
18 — 19	文政 1 — 2	
19 — 20	文政 2 — 3	
20 — 21	文政 3 — 4	J.F. van Orermeer Fisscher
21 — 22	文政 4 — 5	
22 — 23	文政 5 — 6	Nikolaas Tullingh
23 — 24	文政 6 — 7	Phillip Franz von Siebold
24 — 25	文政 7 — 8	Phillip Franz von Siebold
25 — 26	文政 8 — 9	Phillip Franz von Siebold
26 — 27	文政 9 — 10	Phillip Franz von Siebold
27 — 28	文政 10 — 11	Phillip Franz von Siebold
28 — 29	文政 11 — 12	Phillip Franz von Siebold
29 — 30	文政 12—天保 1	H. Burger
30 — 31	天保 1 — 2	
1831 — 32	天保 2 — 3	
32 — 33	天保 3 — 4	
33 — 34	天保 4 — 5	
34 — 35	天保 5 — 6	
35 — 36	天保 6 — 7	
36 — 37	天保 7 — 8	
37 — 38	天保 8 — 9	
38 — 39	天保 9 — 10	
39 — 40	天保 10 — 11	
40 — 41	天保 11 — 12	
41 — 42	天保 12 — 13	
42 — 43	天保 13 — 14	
43 — 44	天保 14—弘化 1	
44 — 45	弘化 1 — 2	
45 — 46	弘化 2 — 3	
46 — 47	弘化 3 — 4	Scherer
47 — 48	弘化 4—嘉永 1	
48 — 49	嘉永 1 — 2	Oto G. J. Mohnike
49 — 50	嘉永 2 — 3	Oto G. J. Mohnike
50 — 51	嘉永 3 — 4	Otto G. J. Mohnike
51 — 52	嘉永 4 — 5	
52 — 53	嘉永 5 — 6	
53 — 54	嘉永 6—安政 1	
54 — 55	安政 1 — 2	J. K. van den Broek
55 — 56	安政 2 — 3	J. K. van den Broek
56 — 57	安政 3 — 4	J. K. van den Broek
57 — 60	安政 4—万延 1	

一般講演要旨

本邦史上に見る薬効認識の変遷

吉田　一郎

わが国薬物の記録は遠く神話時代に始り、これが既に「古事記」「日本書紀」に伝えられたが、史上にその専門の学的色彩をとどめたと見るべきものは和気広世の著としての「薬経太素」をはじめとし、次いで「本草和名」がある。また平城天皇命じて各地の古医方を上らしめた「大同類聚方」、清和天皇の御宇その勅を奉じて菅原岑嗣が「金蘭方」を撰したが奇しくも今日に伝わるものは僅かに「本草和名」のみである。それに前後して韓医方及び中国から唐の医薬が輸入されたが、降つて安土桃山時代の中期、武州川越の田代三喜（一四六五―一五八七）なる僧医が中国の当時明に往き、世にいう『金元医学』を修得しこれをその弟子（特に京都の曲直瀬道三ら）と国内に拡めてから大に行われ江戸期に至るまでその影響は深厚なものがあつた。この薬物に関する道三の著「能毒」は重きをなした。

江戸時代に入ると、これより先きの平安朝から室町時代を通じて専ら唐船で輸入された文物の中に外国の医流やその薬物があつた。これに加えて慶長十二年（一六〇七）幕医の林羅山が「本草綱目」を長崎に得てから薬品の数とこの効用範囲が一段と拡張した。この時代に国内の一派が中国漢代に復古した医流を樹立し『古方』と称しわが国独自の領域を開拓し医薬の効果についても革新的な考え方を実行した。やがて幕末に入ると急激に欧米の文明を導入してここに『明治大正』を輝やかしく開化した。斯く古来からの延々とした一大潮流を観望すると我が民族の辿つた薬物への認識が幾条かの曲線を交錯して無限の興味が湧くのである。

（埼玉・深谷市・薬学）

禹余粮小考

三木　栄

古く「神農本草経」から見られる石薬の一種である禹余粮及び太一余粮について、その由来と種類、生成・組成・薬効、用途の変遷などを考えたいと思う。演者所蔵の珍品エビ化石入り禹余粮を供覧する。

（大阪・堺市・内科）

江戸時代の食療書と「食道記」

赤松　金芳

江戸時代における食療書としては、曲直瀬玄朔の「日用食性」、名古屋玄医の「閲甫食物本草」、向井元升の「庖厨備要大和本草」、平野必大の「本朝食鑑」、松岡恕庵の「食療正要」、小野蘭山の「飲膳摘要」等をはじめ、数多のものがあるが、その中で、奥村久正の「食道記」について考察を加えることとする。

（昭和薬科大学）

初期蘭医方の薬品

佐藤文比古

わが国に和蘭医法を初めて伝えたのは Maerten Wesselingh（1637）である。その後長崎の商館医が度々通詞や医師に医方を伝えたので、次第に知られるようになった。洋薬はそれ以前にも南蛮医によつて使用されたが少数で青タバコ、ヤシホノ油、カラシ、キリン血、雷丸油くらいなもので、それに飲食品の利用によるものとして牛脂、オリブ油、バター、蜜、葡萄酒が加わつていた。蘭医方では以上の外、献上品としてミイラ、ヘイサラハサラ、アメントウ、一角、血留石、陳陀酒があり、国外注文品としては硫酸、テレメンチイナ、ホルオルテル、サフラン、アンモニアゴム、ガルバン樹ゴム、オポポナルゴム、コホフオニア、ゲンチアナ根、コンソリダ根、カンタリデス、メルキローテン花等があり、又輸入薬品にはゴム類、水銀、緑礬、明礬、硝石、桂皮、肉豆冠、胡椒、土茯苓、甘草、竜脳、沈香、麝香、蠟、蜜、珊瑚等が知られている。寛文十年（一六七〇）長崎通詞の差し出した「阿蘭薬草功能之書」同十二年通詞の差し出した製剤法の書から使用薬品を知り「外科良方」「本草薬名備考」中の洋薬と照合してみた。

（明治薬科大学）

蘭方製薬史（第六報）

―江戸後期の反訳医書にみられる製薬技術―

宗田　一

長崎のオランダ通詞を介し断片的に伝えられた蘭方製薬

法は、蘭語学の浸透につれ、直接蘭書、またはその反訳書からも学ばれるようになる。

蘭方反訳医書は大抵の場合、薬物書が付されているが、これは読者の便宜をはかつて反訳者が各種蘭書乃至は反訳薬物書（単行）から編述したものが多く、実用の目的なので体系的でないのはいたし方ない。

いま、「解体新書」刊行以後における主な蘭方医書とそれに付された乃至は関連ある薬物書を挙げると次の通りである。

蘭療方　――　同薬解
和蘭医方纂要　――　付録（製薬装置図入り）
和蘭内外要方　――　和蘭薬剤譜（未刊？）
眼科新書　――　付録（製薬装置図入り）
西医知要　――　付録
三法方典　――　製薬部（製薬装置図入り）
究理堂方府（記聞）――製薬帳秘（　〃　）
泰西熱病論　――　付録（　〃　）
和蘭窮理外科則　――付録薬方編
扶氏経験遺訓　――　〃
公氏医宗玉海　――　〃

単行の薬物書（製薬書）については略す。このような製薬知識の必要は、製薬化学へと目がむけられ、その基礎となる化学書の反訳を生むようになる。そのはしりは宇田川槐園訳「製煉術」（原書プランカールト）であり、体系的化学書刊行の嚆矢として有名な宇田川榕庵の「舎密開宗」はその序に『我ガ医術・製薬ノ法モ亦大都ネ此学壊ノ版図ニ帰セザルハ莫シ』とあるのでその目的が窺われるし、高野長英に「分離則」、藤林普山に「西洋離合源本」（原書プレンキ）があるのも同様の目的と解される。

勿論、書物から学ぶ技術は隔靴瘙痒の感があるのいなめないとしても、出島蘭館付医官らの指導と相俟つて、簡単な製薬法は必要にせまられてかなりの範囲に蘭方医の間に応用されていたと考えられる。

演者はこの当時の二、三の製薬技術を例示しつつその実体を考察してみたい。

（大阪・吉富製薬）

郵便切手でみるフランスの医学史

古川　明

世界の多くの国々が、郵便切手の図案として、文化人の

肖像を描いている。フランスはもつとも早くから、文化人切手を発行しているので、その種類はおびただしい数に達している。したがつて、そのなかには、医学に関係ある人物の切手が少くない。基礎医学方面の Pasteur, Bernard, Calmette ら臨床医学方面の Charcot, Nicole, Fournier, Laënnec, Paré ら、放射線学の Curie, Becquerel らのように、日本でも親しみのある人びとが多い。またノーベル賞を受けた者としては、Becquerel, Curie (Pierre et Marie), Laveran, Metchnikov, Nicole, Richet, Schweitzer をあげることができる。これに反して、日本人にはその名があまり親しみのない人びと、たとえば Béclère, Tellion, Picqué, Roussin, Villemin, Jamot, Fachard らも描かれている。しかしながら、これらの人たちは、フランスが世界に誇ることのできる人物として切手に選ばれたのであるから、その業績はフランス医学史には欠くことのできないものであろう。演者はフランス医学に関係のある切手を約五〇種ばかり収集することができたので、これら切手写真を供覧し、フランス医学のあゆんできた道を回顧してみたいと思う。

なおフランス以外の国から発行された切手もあるので、これらも含めてある。また医師ではあるが、政治・軍事・宗教・革命・探険、そのほか医学以外の方面に活躍した人びと、たとえば Clémenceau, Ballay, Augouard, Blanqui, Charcot (fils) らの切手も参考として供覧する。

（東京・篠原病院）

日本におけるヒポクラテス画像について

中野　操

蘭学興隆期以降、あたかも、漢方医における神農像に相当するものとして、西洋の医祖ヒポクラテスの画像が蘭方医の坐右に掲げられて医道を守り医学の発展を期するささえとされた。

ヒポクラテスの画像は、画家に描写せしめたものもあれば、また蘭学者自身が描写したものもある。様式は墨画淡彩のもの、洋画風のものがあり、また銅版図や石版図もある。かわつたものでは電鍍塑像や陶製塑像などもあつた。こうしたヒポクラテス画像の沿革などについても調べたと

ころを述べてみたい。

なおヒポクラテス画像の天部には、クルムスの解剖書に記されたヒポクラテスの略伝を蘭字で採録したものが多い。それは次のような辞句である。

J. A. Kulmus heeft in zijn ontleedkundige Tafelen gezegt, Dat:

Hippocrates Coüs feeft ons de alderoudste gedenktekenen der Ontleedkunde, shoon, verspreid in zijne Schriften, Naagelaaten waar onder meede een bijzonder bock van de Ontleedkunde is. Hij heeft in griekenland 432 Jaaren voor de geboorte van Christus, onder de regeering van Perdiccas, den tweeden koning van macedoniën, geleeft, en Zoude 104, (anderen berigten 109) jaaren oud geworden zijn, Hem Komt nog heeden ten daagen met regt de voorrang onder alle de Geneesheeren toe.

（大阪市阿倍野区晴明丘・内科）

解剖学ジアムバチスタ・カナーノの事蹟

小川　鼎三

Giambattista Canano（一五一五―一五七九）はフェララの解剖学者で、短掌筋を発見し、また静脉弁の存在と意義を最初にみとめた人といわれている。フアブリチウスやハーヴェイが静脉弁をみたよりもはるかに早いのである。カナーノは腕や手の筋肉についてすぐれた解剖書をだしたが（一五四二）、ヴェサリウスのフアブリカの原稿ないし挿図の見本刷をみせられて、ヴェサリウスの優位をみとめて自らの著書を破棄したといわれている。同じ時代に生きて、共に解剖学の研究に身を挺したこの二人の学者の性格のちがいを問題としてみたい。

（順天堂医大・医史学）

典薬諸家の概観　―福井家―

羽倉　敬尚

典薬諸家のうち福井家系図を中心として、おもに出自に

ついて述べる。スライド使用。

（東京都港区青山南町・史学）

京都にウイリスの跡を訪ねて

鮫島　近二

慶応四年正月、鳥羽伏見の役に、薩藩病院を京都相国寺塔頭養源院に設け、薩藩の負傷者を収容してウイリスをして治療に当らしめた。演者は昭和二七年及び三四年の二回、同院を訪れて薩摩健児が徒然なるままに、柱に刀痕を残したるを見て感慨をさそつた。

（東京都新宿区下落合・眼科）

尾州藩医「浅井氏家譜大成」と「浅井系図」及び国幹の「墓に告ぐる文」について

矢数　道明

尾州徳川家の藩医として十代に亘つて継承された浅井家は、家学として素霊の学を講じ、方術も後世派的色彩をおびるものが多かつた。

十代目を継いだ浅井国幹が、晩年克明に書き綴つた「浅井氏家譜大成」は、その家学の伝承を知るに足るものであり、歴代継承によつて書きこみを行つていたという「浅井系図」は、名門浅井家としての連綿たる伝統を一目瞭然たらしめる好個の資料である。

国幹は愛知博愛社、東京温知社、帝国医会を通じ、二十四年の長きに亘つて漢方医術存続運動のため身を挺し、悲劇を一身に背負つて五十六才の生涯を終つた。

即ちこの二資料と、国幹の「墓に告ぐる文」とを併せみるときは、江戸時代より明治中期に及ぶ、漢方医学興亡の一貫した変遷がみられるのである。（東京医大・薬理）

オランダ伝来の生理学書とその和訳本についての研究

内山　孝一

山脇東洋が人体解剖を観察し蔵志を刊行（一七五九）し、参考にしたオランダの本は Veslingius の Syntagma anatomicum（一六四一）を Blasius が訳した本（一六

五九）で図と実際の解剖を比べてよく一致することを知つた。

前野良沢を盟主として杉田玄白らが Kulmus の anatomische Tabellen（一七三二）の Dicten による蘭訳 Ontleedkundige tafeln（一七三四）を和訳して「解体新書」五巻を一七七四年に刊行し、その一年前に「解体約図」を出している。この本が解剖学と生理学の大意を記したものなることはよく知られるようになつた。

高野長英が Blumenbach の生理学を Breggen が蘭訳した本（一八三〇）により訳し「医原枢要」一巻を刊行した（一八三二）。内編五巻の写本があるが、和訳したというよりは参考にしたといつた方が適当であろう。緒方洪庵は「人身究理学小解」（一八三二）を Roose の生理学を Ypma が蘭訳した本により和訳したが出版されなかつた。

Richerand の生理学は Erpecum により蘭訳（一八二六）されている。広瀬元恭はこれにより「リシエラン人身究理書」三巻を刊行（一八五五）、また、堀内素堂・黒川良安・青木研蔵共訳により「医理学源」二巻（一八四四）、箕作阮甫は「人生鏡原」一巻をなしているが、ともに刊行されなかつた。

広瀬元恭は Ypey の生理学（一八〇九）の和訳を試み「知生論」三巻を刊行（一八五六）した。

以上にあげた高野長英・黒川良安ら、緒方洪庵・箕作阮甫・広瀬元恭の訳本は完訳本ではなく抄訳か一部の訳であつた。

大槻玄沢の「重訂解体新書」（一八二六）は、一三巻別に付図一帖として刊行され、杉田玄白訳本より一段と充実したものとなり、附録中にも興味ある記述が見られる。

緒方洪庵が「病学通論」三巻を刊行（一八四九）したが第一巻は生機論と題し Richerand, Blumenbach, Roose の生理学を参考して成つたと記している。

Pompe が来朝して医学各科の講義をしたのであるが（一八五九―一八六〇）、佐藤尚中が和訳してポンペの「人身究理」三巻を作つた（一八六〇）。これはポンペの講義を忠実に訳したものといつてよいであろう。

島村鼎甫の訳述した「生理発蒙」一四巻（内、附図一巻）は一八六六年に刊行され、大沢謙二はこの本により生理学の初歩を学んだと考えられる。そのオランダの本は Lubach の生理学書（一八五五）であつた。

Koster の生理学を Halbertsma がオランダ文に訳出

（一八六二）した生理学書は Bouduin の弟子が和訳し「コステル生理書」と題した写本が二巻ある。写本の第一枚目の表にコステル人身究理巻の一、次行にボードイン参訂口授とあるところから、Bouduin が Koster のオランダ訳本により講義し、その和訳を誰かがしたものであろう。

なお Sebastian の人体生理学総論が Dompeling により蘭訳され一八四〇年に Groningen で刊行されている。これがわがくににあることを知つたのは比較的近頃である、わがくにで読まれたことも事実だが訳本はないようである。

また Budge の生理学は Cohen により蘭訳され一八五〇年に Groningen で刊行された。わがくににおいて誰の手によつてか明らかでないが丹念に写本が作られている。この本もわがくにで読まれていたことは明らかである。しかしその和訳本のあることをきかない。

江戸時代に出版された蘭訳書は多数にあるが、生理学の本を参考にして記述された本は以上の諸本にとどまらないが、ここではオランダの生理学書とその和訳本についてのみ述べた。

（日大・生理）

わが国初期のアメリカ医学

長門谷　洋治

わが国に来た米人医師の最初は J. C. Hepburn（ヘボン）である。彼以前には、わが国にアメリカ医学は全く紹介されていないから、彼を最初のアメリカ医学の紹介者とみたい。その他、彼についてはつぎのようなことがいえる。①彼は来日米人、来日プロテスタント宣教師としても最も初期の人にあたる。②宣教師を兼ねた医師、すなわち宣教医であつた。③それまでの西洋医学が長崎を中心に発展したのに対し、彼は横浜を中心に活躍した。④終始、在野的地位にあつた。

その後、幾人かの米人医師が来日したが、彼らも Hepburn とよく似た性格を有しているものが多い。すなわち①宣教師が多い　②在野的地位にあり、その活動は多く孤立的、個人的、一時的である。③一般教育、刑務所問題、あるいは教会活動などで、一般民衆と結びついた者は多いが、医学教育、医療行政などにより、直接わが国の医人、医学と結びついた者は少ない。

結局当時のわが国におけるアメリカ医学の特長は、①日本から招いたものでなく、アメリカが極東進出の一手段として、利用したものがたまたま、医療伝道という形式をとつたアメリカ医学であつた。（ドイツ医学採用の場合との相違点）②宗教、すなわちプロテスタントと密接に結びついていた点にある。そして結果として、アメリカ医学は、わが国がオランダ医学からドイツ医学へ移向するに際し、その橋わたし的な役割を果したが、ついにその王座を獲ることはできなかつた。と同時に、やはり主として彼らによつて紹介されたプロテスタントも、初期の華やかな開花のあとは、むしろ衰退傾向におちついた（ただし医学の場合のように、決定的打撃は受けていない）。この両者の消長には何らかの関連性が存在すると思われる。

かかる意味から、わが国初期のアメリカ医学はひとつの特異性をもち、医学史上興味あるものがあると考えられる。

（大阪・日生病院）

鉱山における友子同盟について（第二報）

三浦　豊彦

一九六一年の医学史研究会総会で、日本の鉱山にみられた自助救済の制度である友子同盟について報告したのであるが、その後集つた資料について報告したい。

友子は徳川期から既に存在した労働者である坑夫の間に発達したものであつて、坑内衛生状態の悪さ、ことに珪肺等の多発したこと、それに災害、こうした疾病災害の悲惨を眼の前にして、自然に発生し、又自然に消滅した制度であつて、働けなくなつた坑夫を自分達の間で救済することを目的としていたが、同時に技術の修行のためのグループでもあつた。

しかしこの制度は坑夫の間で自然発生的に発生しただけに、殆んどその記録も残されていないし、残つている記録も徳川初期のものが伝承されているに過ぎない。

鉱山の会社の社史でも殆んど友子についてふれる所はない。

鉱山によると戦後までこの友子制度の残つた所もあるが、もはや救済については何の功にもならなかつた。

大体大正年間に実質的には消滅したと考えてよいのであるが、その記録についても既に散逸し、鉱山当局にもわからないものが多い。

（労研）

法賢が訳した小児科の仏典について

杉田暉道

密教関係において、これに属する仏典では医療に関するものがかなり多いが、今回はその中の小児科の治療法について述べられた経典の内容について発表する。詳細は当日プリント配布。

（横浜市大・公衆衛生）

「素問」の成立について

丸山昌朗

一、本問題を考究する作業仮説として、私は原素問の撰述者を、陰陽応象大論の著者と見做した。

二、現存する「素問」の二十四巻本中、十九巻以降は、明らかに後代の加附であり、又十八巻以内でも、六節蔵象論中段と霊蘭秘典論の如きも明らかに、原素問以降の作製と考えられる。猶其の他上古天真論外数編疑わしいものがある。

三、「素問」の成立をその内容から推察する鍵は、大要すると三つある。その(1)は陰陽五行説に関するものであり、(2)は脉診の種別であり、その(3)は治療に於ける諸問題である。

四、結論づけると、「素問」の製作意図は、当時存在していた医経（黄帝内外経、扁鵲内外経、白氏内外経旁篇等）の諸医書から一統一派に偏せず、大乗的見地から針灸に最も必要な概論的内容を抜萃して撰述したものと考えられる。かかる意図は「淮南子」が、当時存在した諸子百家の説を綜合したことに刺激されたものであろう。

「甲乙経」の皇甫謐の序文以来、「黄帝内経」十八巻は「素問」と「霊枢」の合併したものと一般的には見做されて来たが「素問」の撰述と「霊枢」の撰述は、その意図を異にし「素問」は「黄帝内経」の一部とは考えられない。私は「素問」の成立時期は、後漢の初期を去ること遠から

ざる時代と推測している。

（東京都新宿区若葉町・東洋医学）

八丈島医学史

石原　明

伊豆七島中の最南端八丈島は、属島の小島と青ヶ島とともに黒潮本流の南にあり、北部伊豆諸島と極めて異なる民俗と生物相を有し、また古くより貢絹の島、流人の地として知られているが、医史学的に考察するとき、本土と著しい差を認め、原始医術の名残りを留め、いまに南方系シャーマニズムが存在している。また人類学的に八丈島には風葬と洗骨葬の二系統の分類が認められ、伝説上からも始祖を異にする。月経と産の忌みが強く、他火小屋の制があり、高倉の存在はミクロネシア文化の影響を思わしめる。鎌倉期の仏像や工芸品の現存と三浦半島に存する運慶の造像銘に八丈絹の名称がみえ、島内に式内社を有すること、為朝伝説が幕末には疱瘡神として江戸に出開帳したこと、亜熱帯植物の薬用などに本土との差を認めることが出来る。とくに二百数十年にわたる人口統計と流人帳の原本があり、これによつて特殊地域の人口動態と生活様式を知るに絶好の地である。最近では七島熱、マレー糸状虫症、トリコマイシンの基原など医史学的に多くの興味ある資料を提供している。演者はカラースライドと古地誌によつて八丈島を中心とした医学史を民俗学的に解明して郷土医学史のあり方について一つの新しい研究方法を発表して批判を仰ぎたい。

（横浜市大・医史学）

日本医史学雑誌　第十巻　第一号
昭和三十七年五月十五日印刷
昭和三十七年五月二十日発行
発行所　東京都板橋区大谷口町日本大学内　日本医史学会
編集者　横浜市中区長者町三ノ三二　石原　明
印刷所　東京都北区神谷二ノ四五　大洋印刷産業株式会社

日本医史学会小誌

本会創弁在公元1892年，富士川游氏等首唱先人之遺業顕彰和医道的発揚，結成了「私立奨進医会」為此本会的先駆・爾後発刊了「奨進医談」与「中外医事新報」両個的報紙・在1927年改称「日本医史学会」，専弁編刊史的専誌・在1941年4世董事藤浪剛一氏時，改称「日本医史学雑誌」・自1945年至1953年戦後多難事休刊了・1954年春復刊，現在刊出10巻・別在大阪関西支部，董事中野操氏刊出「医譚」此亦為本会機関誌・吾們請親愛的中華医史専家諸先生，祖先宝貴的古代医学遺産交流探討，相俱工作世界人類幸福！特致敬礼・郵寄宝貴意見和文籍交換，下記地址・

日本医史学会連絡事務所：横浜市中区長者町 3-32　石原　明

日本医史学会関西支部：大阪市阿倍野区晴明通 2-21　中野　操

The Japanese Society of the Medical History

History: Founded in 1892, by Dr. Y. Fujikawa.

Purpose: To encourage the study on medical history, teaching as will as publication and research on medicine.

Publications: (1) "Journal of the Japanese Society of Mecical History" (Nihon Ishigaku Zasshi) 1941～1944: 1954 to date. Q. B5. P. V. Free to members.

Formerly: "Chugai Iji Shinpo" 1927～1940.

(2) "I tan" (Journal of the Kansai Branch of J. S. M. H) 1938～1943: 1952～ to date. Q. B5. p. v

President: Teizo Ogawa. (Juntendo Med. Univ.)

Secretaries: Akira Ishihara. (Yokohama Univ. Med. School)

President of the Kansai branch: Misao Nakano (Osaka)

Address of the office: C/O Department of physiology, Nihon University. School of Medicine. Itabashi, Tokyo. Japan

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the

Japanese Society of Medical History.

Vol. 10. No. 1. May, 1962.

CONTENTS

The 63th General Meeting of the

Japanese Society of Medical History

(20. May, 1962. Keio Univ.)

Special Lectures ..... (1)

Ophthalmological History in Japan

..... Yukimasa Nakaizumi ..... (1)

Medico-historical studies of "Japan Dagregister" ..... Ranzaburo Ootori ..... (11)

General Report ..... (17)

News ..... (9)

The Japanese Society of Medical History

c/o Department of Physiology. Nihon University.

School of Medicine. Itabashi, Tokyo.